



2021

夏号

まつさか歴史文化かわら版



第10号

東京五輪の聖火が
歴史ある町並みを駆け抜けました



オリンピック聖火リレー（旧長谷川治郎兵衛家前）



オリンピック聖火リレー（旧小津清左衛門家前）

松坂城跡や御城番屋敷、旧長谷川治郎兵衛家前等、松阪の名所旧跡をつなぐコースを4月8日聖火が駆け抜けました。新型コロナウイルス対策で多くのイベントが中止になるなか、松阪から全国に希望を発信する行事になりました。

旧小津清左衛門家の前でも聖火を引き継ぐ「トーチキス」が行われました。

旧長谷川家の前を走った元松阪大学ラグビー部監督の上村さんは「全国各地を歩いた松浦武四郎や竹川竹斎に思いをはせながら走りました。沿道に知り合いや懐かしい顔がたくさんありました。」とのコメントを出されています。松阪の歴史ある町並みと人々の心にまたひとつ新しい歴史が刻まれました。

今回の展示はここがみどころ！

◆「風流家」 長谷川元貞

旧長谷川治郎兵衛家

令和3年6月16日(水)～9月12日(日)

長谷川元貞(1796～1858)は、江戸大伝馬町一丁目の木綿商丹波屋の8代目当主でした。元貞は、紀州藩から大年寄(町役人の筆頭)や御為替組御用などの責務を負わせられる傍ら、梅窓・六有斎などと号して文雅を好みました。歌を本居春庭、茶の湯を裏千家の認得斎、玄々斎、書を市河米庵、巻菱湖に学び、俳諧、漢詩に通じました。また蔵書家の一面もあった元貞は、外宮の豊宮崎文庫や内宮の林崎文庫、藩校の松坂学問所に書籍を寄進しました。

このように、長谷川本家歴代の当主のなかでも文化活動に熱心だった元貞は、頼山陽、中島棕隠、梅辻春樵、貴名海屋らの文化人と交友関係を持ち、そのひとり曲亭馬琴は書簡のなかで「風流家」元貞を評しています。本展では、元貞に係わる生活道具や文書資料を通して、彼がどのような人物であったかをご紹介します。



聞まゝの記 長谷川元貞 筆

◆江戸のツーリズム

旧小津清左衛門家

令和3年7月14日(水)～9月26日(日)



伊勢参宮名所図会

江戸時代になると、全国的に街道や宿場町などの交通環境が整備され、農民や町人の生活が向上したこともあって、庶民による寺社参詣や湯治などの旅が盛んに行われるようになりました。また、旅人が携帯する道中記・巡覧記・名所記などと呼ばれる旅路の宿駅・距離・駄賃・関所・名所旧跡などが記されたガイドブックが盛んに刊行されました。

このように、旅する環境が充実するに伴い、松阪はお伊勢参りの旅人が行き交う宿場町として発展しました。本展では、江戸時代の旅の際に使われた道具類や紀行文などを通して、当時の旅をご紹介します。現在、コロナ禍で気軽に旅ができない状況ですが、かつての旅人の気分を追体験していただけたら幸いです。

◆紀州藩と松坂

原田二郎旧宅

令和3年8月18日(水)～12月12日(日)

元和5年(1619)、徳川家康の子頼宣が駿河国駿府(静岡市)より紀伊和歌山に入封して誕生した紀州藩は、紀伊一国のほかに伊勢国内に勢州三領(松坂・白子・田丸)を領有しました。そのため松坂城下には、勢州三領全体を統治する松坂城代や勢州奉行などの要職が置かれました。

そのため、松坂の中心市街地には、今もその名残を垣間見ることができます。松坂城跡(国史跡)の東側には、松坂城を警護する武士たちが居住していた御城番屋敷(国重要文化財)や、紀州藩士の「同心」クラスの武士たちが住んでいた同心町(現：殿町)があります。本展では、紀州藩に関連した資料を通して紀州藩と松坂の係わりをご紹介します。



紀州藩御用文書箱



松阪市立歴史民俗資料館リニューアルオープン応援企画！

◆映画看板制作の技法・デッサン講座を開催しました

小津安二郎映画看板展開催中の5月4日、原田二郎旧宅にて、看板作者の紀平昌伸氏(現代の名工)を講師に迎えデッサン講座を開催しました。

引き伸ばした各自お気に入りの写真を暮盤目状の大きなパネルに鉛筆で写していきます。「黒目の位置がもう少し上かな…」「眉毛の流れをもっと力強く…」、先生のアドバイスのなか、受講者の皆さんの表情は真剣そのもの。2時間の講座の終了時には写真以上に生き生きとした作品に仕上がり、その出来栄に皆さんとても満足されたようです。



○藍のたたき染め体験！

◆真夏が旬の藍の生葉をたたき染めして、自分だけのオリジナルマスクケースをつくってみませんか。

・実施日時：7月31日(土) 第1部 午前9時30分～ 第2部 午前10時～
(所要時間：約1時間30分)

・場 所：旧長谷川治郎兵衛家
・対 象：小学生以上
・参加費：300円(マスクケース1枚付)
別途入館料が必要です
・お申込：旧長谷川治郎兵衛家まで



○あなたも戦国武将に！

◆松阪手作り甲冑愛好会制作の手作りの甲冑を着て松坂の街を歩いてみませんか？午前10時～午後3時 所要時間は約1時間、参加費無料です。

・実施日：令和3年7月から11月までの
第2・第4土曜日(8月は除く)
・場 所：原田二郎旧宅(松阪市殿町)
・対 象：小学生以上
・お申込：不要です

※天候・コロナ感染症の状況によっては、中止・変更の場合もあります。



● 『東海道中膝栗毛』と松阪



江戸時代の旅の文学と言えはおそらく誰もが思い浮かべるのは、十返舎一九（1765～1831）の『東海道中膝栗毛』（文化3年（1806）刊行）ではないでしょうか。江戸の長屋住人の弥次郎兵衛と喜多八が、厄落としに伊勢参りを思い立ち、東海道を江戸から伊勢神宮、さらに京都、大坂を旅しながら、狂歌・洒落・冗談をかわし合い、行く先々で失敗や滑稽を演じる様子がコミカルに描かれています。この作品の中に、松阪が登場する場面がありますのでご紹介します。

伊勢参りの途中、松阪の町に到着した弥次郎兵衛と喜多八は宿を探します。寝るだけにお金がかかる旅籠屋に泊まるのは無駄だと思った2人は、安価で泊まれる木賃宿で一泊します。朝6時ごろ宿を出発する際に、次のような歌を詠みました。

鶯も輪になりて舞ふ日ぞたび人のおどり出たる松坂のやど

（早朝、鶯が輪を描いて飛ぶ晴天に、旅人も心うれしく宿からもおどり出たのは、松坂踊りならぬ、松坂の宿だった。）

松阪の町を後にした2人は、やがて櫛田宿（現：松阪市豊原町）に到着します。ここには「おかん、おもんといえる二軒の茶屋あり。餅の名物なり。」と紹介し、次の歌を詠みました。

旅人はいづれにこゝろうつるやとおもんおかんが売れる焼きもち

（おもん、おかん、どちらの方に旅人の気が多く引かれるかと、やきもちしながら、焼餅を売っている。）

この茶屋については、寛政初年（1790年頃）に刊行された洒落本『面美多通身』にも登場します。そこには「くし田の伊賀町におかんへんばといふ餅はつがもなくうまかつたの」と記され、へんば餅を名物とした茶屋だったことがうかがえます。「おもん茶屋」跡は、豊原町の伊賀町集落に現存し、白壁・虫籠窓・瓦など当時の名残を感じることができます。

その後も、弥次郎兵衛と喜多八は、ドタバタ劇を繰り返しながら伊勢神宮へと向かいます。

『東海道中膝栗毛』は、旅に憧れた江戸時代の庶民に愛読され、一躍ベストセラー本になりました。旧小津清左衛門家の企画展「江戸のツーリズム」（令和3年7月14日～9月26日）では、『東海道中膝栗毛』も展示しますのでぜひご来館ください。



おもん茶屋跡



弥次郎兵衛と喜多八が驚いている様子
（『東海道中膝栗毛』より）

歴史文化3施設のご案内

【開館時間】9:00～17:00

（16:30までにご入館ください）

【休館】月曜日（祝日の場合は翌日）
／年末・年始

【連絡先】

- ◆旧長谷川治郎兵衛家
Phone: 0598-21-8600
- ◆旧小津清左衛門家
Phone: 0598-21-4331
- ◆原田二郎旧宅
Phone: 0598-23-1656



発行 NPO法人松阪歴史文化舎
〒515-0082 松阪市魚町1653
Phone: 0598-21-8600

E-mail info@rekishibunkasha.onmicrosoft.com

